

ミカエル・セルヴェトゥスの思想形成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉塚, 平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1659

ミカエル・セルヴェトゥスの思想形成

倉 塚 平

一、問題の所在

一五一七年、ルターがヴィッテンベルクの城教会に九十五ヶ条を貼出すとともに、そして、万人司祭の原理が、かの普^カ遍^{トリック}公同の教会によって疎外された人々の魂に滲透するとともに、それは驚嘆すべき百家争鳴を生みだすにいたった。町々村々の目に一丁字を解せざるかの職人や農夫たちが、字を学び聖書を読みはじめたばかりでなく、いっぽしの神学者を自負し、各々聖霊の光に照らされ、良心の信じるところに従って、聖書を解説し合い、福音の真理を論じ、かつ弘めはじめたのである。そこには、千年にもわたって、人々の死後の世界にも及ぶ、徹底した内面性の疎外によって存続しつづけてきたオーソドキシイの支配から、自己を奪回せんとする渴えた魂の高貴な希望が輝いていた。

宗教改革は、いわゆるプロテスタントイズムという概念で一括しようような、単一のイズム乃至は運動ではないし、ルター主義、アナバプティズム、ツヴィングリ主義、カルヴァン主義、アングリカニズム等々の数個の宗派をその構成要素とする複合的現象でもない。それは、史上曾て例を見ないほどの、キリスト教普遍世界をおおおう全民衆的規模をとって醗酵した巨大なる精神の覚醒運動であり、その運動は、秘かなる個の内奥の魂によって担われたかぎり、無限の彩りと無

限のバラエティをもっていたのである。そして、ひとたび崩れたオーソドキシイは、ふたたび回復されることはない。百家争鳴のいきつくところ、あらゆるオーソドキシイは形骸化され、プロテスタンティズムは変遷に変遷を重ね、遂には神と真向から対座した孤独なる個の心の対話に帰着することになったのである。

さて、豊かなバラエティをもったこの偉大なる良心のドラマを演じた無数のアクターの群の中に、慧星のごとく出現しひとときは耳目をそばだたせた悲劇的な一人の異端があった。それは、血液肺循環の発見によって科学史上記憶にとどめられ、またその悲劇的殉教によって今なお正統派カルヴィニストの胸に悔恨の念をうづかせ続けているスペイン人ミカエル・セルヴェトゥスである。プロテスタンティズムが、神によって創設された地上の客観的救済機構としてのカトリック教会に対して反逆し、宗教を個の主観的内面のうちに奪回したかぎり、それはいかなる權威によって正統化しようとも、光栄ある異端であることに 변りない。だが、異端百家のうちでも、とりわけ異端中の異端であったこのセルヴェトゥスは、終生一人の同志も伴侶もたない孤高なる一匹狼として、カトリック異端審問所に追跡されたばかりでなく、プロテスタントの一正統派の根拠地たるジュネーヴにおいて、神政独裁の指導者カルヴァンによって焚刑されるという悲劇的最後を遂げるに至ったのである。だが、彼の死灰の中から、宗教的寛容と内面的自由の叫びが、セバスチャン・カステリオンを通じて声高らかに宣せられ、彼の説いた反三昧一体の主張は、やがてソシニアニズムに受継がれ、さらにユニテリアニズムとなって、東部辺疆地帯より西欧世界全域に逆流し来り、あらゆる正統派的ドグマティズムを喰いつぶし、近代の宗教的個人主義を生みだす秘められた一つの原動力となるにいたったのである。

ところで、従来の宗教改革史研究においては、ルター、カルヴァン等々の巨星の前に色褪せて、改革のドラマに加わっ

た無数の速製神学者たちの多彩な姿は往々にして見失われ、歴史の巨大な流れの底に沈没せしめられてきた。わが一匹狼セルヴェトゥスもその一人である。しかも彼の場合、カトリシズムとカルヴィニズムによって、意識的に埋没せしめられたのだ。ミカエル・セルヴェトゥスを知る多くの者は、ただ彼が、仮借なき論理の独裁者カルヴァンの血祭りにあげられたという点でのみ、すなわち、セルヴェトゥスの悲劇としてではなく、カルヴァンの悲劇の単なる一与件としてのみ知っているにすぎない。その代表的な例は、カルヴァンの「聖者伝作家」エミール・ドゥメルグの、「カルヴァンの栄誉のためにセルヴェ記念碑を建立した」と揶揄された、かの贖罪記念碑に見られるし、また全く逆の立場からカルヴァンをヒトラーと二重写しにして描いたステファン・ツヴァイクの『権力とたたかう良心』の中にも見出される。彼はいう。

「世界観の対立を目に見える形として解決するために、歴史が人類の何百万大衆のなかからある単独の人間をえらびだすことがよくある。しかも、その人間は最高の天才だときままっているわけではけっしてない。運命はしばしば、たくさん名前の中から偶然に見つかったひとつの名前をまるで気まぐれに拾いあげ、後世のひとびとの記憶の中に消し去ることができないほどつよく書きつけて、すましているものだ。ミゲル・セルヴェートが記憶にとどめられる人物となったのも、もっぱらそのおそろしい死のためであって、特異な天才のためではなかった。」⁽²⁾

そしてまた、彼は血液の肺循環の発見者であるという点で、科学史上その名をとどめることになったが、彼をして悲劇的な死に至らした彼の神学思想とその自然科学上の発見とが、いかなる必然的内的連関をもっているのかを知る人はさらに少い。ツヴァイクは、右の文にすぐつづけて次のように書いている。

「この風がわりな人物のなかには豊富で多様な才能がまじりあっていたが、それはうまく調和がとれていなかった。彼

の知性は強靱でいきいきとし、好奇心に富んでいて、頑固であったが、ひとつの問題からつぎの問題へとたえず鬼火のように揺れ動いた。真理を求めめる純粋な意志はあったが、創造的な明澄さには達することができなかった。このファウスト的な精神は、あらゆる学問に手を出し、哲学、医学、神学のいずれの領域でも自由な論客となつて、大胆な観察でしばしばひとびとの目を幻惑するかと思うと、浅薄な山師的行為でみんなの憤激を買つたりしたが、どんな学問にも徹底的にうちこむということはなかった。」「遍歴の旅に出たこの神学のドン・キホーテは自己批評の力がまったくなく、つねになにかを発見したり主張したりしながら、当時のあらゆる壁や水車に頭をぶつけていた。彼の心をかきたてたのは、ただ冒険だけであった。——荒唐無稽なもの、異常で危険なものだけであった。喧嘩っばやい彼は、どんな党派とも結びつかず、どんな派閥にも加わらず、いつも孤独な人間として、想像力にも富んでいるが気まぐれでもあるつねに常規を逸した人間として、自分以外のあらゆる独善家たちにたえず腹をたてながら、彼らに向うにまわして殴りあいをやつていた。」⁽³⁾

なかなか興味深々たる文章ではある。だが、ここから浮び上ってくるものは、人格的統一のとれていない半氣狂いの特異な才能の姿である。彼の思想の総体や、彼の神学と自然科学との内的連関などそもそも問題にさえされていない。異端中の異端の蒙むる人物評とは、いつの世にあつても、まさにかくの如きもの、否、それ以下ですらある。

だが、果たして彼セルヴェトゥスは、対象から対象へと鬼火の如く揺れ動く魂であり、人格的統一のとれていない半狂人であつたのか。一六世紀の思想史となんらの必然的連関をもたぬ知的宗教的ディレッタントであつたのか。⁽⁴⁾この問題に答えるためには、彼の万能的活動と一種矯激に見える行動の底に潜む真の動機を曝き出し、ついで、彼の全思想構造を總体的に把握し、当時の思想潮流との連関を追求することが、われわれには不可欠になつてくるのである。

そして、もしこれに成功するならば、特殊スペイン的状况から生まれ、それを克服せんとする烈々たる革命的ヒューマニズムが赤い一本の線となって彼の全生涯を貫いていたことが判明するし、このヒューマニズムの中に、中世以来の汎神論的神秘主義、ノミナリズムの合理主義、ルネサンスのネオ・プラトニズム、さらに改革派左翼のアナバプティズムが渾然一体となって取入れられ、絢爛たる花を開いていることが見られるであろう。そして、カルヴァンとセルヴェトゥスとの対決は、プロテスタントオーソドキシイと一匹狼の対立だけに止まらず、神と人間とを厳しく深淵をもって距てんとするアルプス以北のすぐれて權威主義的な改革原理と、人間を神にまで高めんとする南欧の、抑圧の壁をつき破らんとするどん底の民衆の革命的ヒューマニズムの改革原理との対決にほかならぬことを知りうるであろう。本論文においては、まず彼の思想形成をとりあつかい、以下数回にわたって、彼の全思想構造を追求することにする。

〔補註〕セルヴェトゥスの思想を研究対象とすることは飽くことなき興味をそそるものであるが、同時に現在の私にとって全く至難の業である。まず第一に、外国研究を志す者としては当然甘受しなければならないことであるが、わが国においてセルヴェトゥスを論じたものは、渡辺一夫氏「ある神学者の話——ミシエル・セルヴェの場合——」（岩波新書『ルネサンス断章』所収）があるくらいのものである。それも、セルヴェトゥスの原典にあたって書かれたわけではなく、Auguste Dide: *Michel Servet et Calvin* (Paris 1907) に従い、また宗教的寛容の問題を主として論じられているのである。彼の思想の内奥に立入ることは控えておられる。わが国の研究の成果の上に立つことは全くできないという点で、大きな制約を蒙るわけである。第二に、セルヴェトゥスの思想的評価がキリスト教会史研究においても、全く定まっていないことである。ルターやカルヴァンら正統派プロテスタント指導者については、宗派、政治的イデオロギー、個人的好悪

の情等によって、価値判断はことなれ、その果した客観的役割の偉大さについては誰しも否定するところではない。だが、カトリックとプロテスタント両陣営から追及されて逼塞の生活を余儀なくされ、著わした著書も焼かれて世人に渡らず、僅か三部しか現在残っていない——したがって、対社会的影響力をほとんどもつことができなかった——セルヴェトゥスの思想については、現在にいたるまで、共通の評価しうる部分さえほとんど全くないといつていいぐらいなのである。彼のパーソナリティについても然りである。ハルナックは、セルヴェトゥスの事跡を一九世紀にいたつて全力をあげて再発掘したヘンリ・トリーニ *Henri Tollin* (セルヴェトゥス再評価の榮は彼が担っているが、しかし同時に再評価が行過ぎて、セルヴェトゥス中心に全宗教改革史を説明しようとするほどになった) にしたがって、「深い敬虔な精神の持主」というのに対して、ドウメルグは「彼は氣狂いではなかったか」というのである。第三に、致命的な点であるが、彼の原典が入手しえなかった点である。主著 *Christianismi Restitutio* は三部しか現存せず、*De Trinitatis Erroribus* は労働科学校研究所のゲッテンゲン文庫にあるが、それは一六二〇年オランダのヘーレンで発行されたオランダ訳であり、とうてい私を読めるものではなかった。ごく最近 *Harvard Theological Studies*, XVI (1932) に *Morse Wilbur* による英訳のあることを知ったが、残念ながら本稿執筆までに入手しえなかった。また、ドイツのミネルヴァ出版社から近々復刻本が出ることを知ったが、未だ手にしていない。

かくして、本稿では、「現在のところ最上のセルヴェトゥスに関する全般的記述」(*Francois Wendel: Calvin, the origin and development of his religious thought*, p. 93) とごわれぬ *R. H. Bainton* “*Hunted Heretic, the life and death of Michael Servetus, 1511—1553*” に主として依拠しつつ、*Jean Calvin: les hommes et les choses*

de son temps” vol. vi のセルヴェトゥスの詳細な引用を参照しつつ、その上に私の独自の分析と解釈をうち出さざるをえなかった。いずれ資料の入り次第、次号以下においてより詳細に論ずることにしたい。

注(一) これについての生々とした記述は、H. Hauser “La naissance du Protestantisme” の第三章 La Propagation de la doctrine

や E. G. Léonard “Histoire générale du Protestantisme” などに見出される。

(二)及び(三) Stefan Zweig “Ein Gewissen gegen die Gewalt: Castello gegen Calvin” 高杉一郎訳「権力とたたかう良心」みすず書房、一三三・四・五頁による。

(4) セルヴェトゥスの神学的位置と役割については、ハルナックにいたって、ようやく教義史の中に席を与えられるに至ったといえよう。ハルナックはなんらの説明も付せず次のようにいっている。「汎神論的神秘主義と唯名論的スコラ哲学とは、前者が思弁的神秘主義に強く傾斜し、後者が冷静な悟性的思考を好むかぎり、多くの点で対照的立場に立っている。しかも、ヒューマニスティックな関心は両者を結びつける絆を与えたばかりでなく、思弁的神秘主義からも、漸やく価値を認められるにいたった「経験」と結びついて、「純粋な」思考がまた発展するにいたった。他方、冷静なイタリア思想家たちは、新しい文化の影響のもとで、初期唯名論が耽っていたかの概念の遊戯という悪しき慣習を放擲したのである。かくして、二つの潮流は合することになった。この結合のもっとも重要な代表者がミカエル・セルヴェトゥスである。彼は深い敬虔なる精神の持主であるという点でもきわだっている。福音派宗教改革を除いて考えるならば、彼のうちには、十六世紀に成熟するにいたったあらゆるものうち最上なものが結合されているのが見られるのである。セルヴェトゥスはまた同じく、経験的探究家、批判的思想家、思弁的哲学者としてもきわだっている。語の最上の意味において、キリスト教的改革者だったのだ。十六世紀の新しい時代の観念によって影響をうけることがもっともすくなく、かつカトリシズムがもっとも早く回復されたスペインにおいて、このようなユニークな男が生まれたということは、歴史のパラドックスである。」Adolph Harnack “History of Dogma” Vol. 7 p. 128

一、特殊スペインの状況

セルヴェトゥスは十七・八才で、故郷スペインを去り、爾来再びその地を踏むことはなかったが、彼の思想と生涯に、拭いがたき刻印を与えたものは、スペインの特殊な宗教的状况であった。従って、まずわれわれは、この特殊的状况の考察から入っていくことにしよう。

十字軍以前、サラセン支配下にあったスペインは、キリスト教普遍世界とイスラム世界の橋となっていた。そしてまた、カリフたちはユダヤ人の商業活動を歓迎したために大量のユダヤ人が定着することになった。そこには、三つの宗教がほぼ平穩裡に共存していたのである。しかし、十字軍は、ピレネーを超えてキリスト教普遍世界に結びつくか、海峡を超えてイスラム世界に結びつくかの決断を、スペインに迫ることになった。かくして、宗教的平和共存は終焉せしめられ、きびしい不寛容が渦巻きはじめる。イベリア半島からイスラム勢力を駆逐する再征服は、レコンキスタ同時にとおそるべき宗教的迫害をともなった。サラセン人とユダヤ人は強制的に改宗を迫られた。一三九一年を絶頂として、幾度となく全スペインを蔽うユダヤ人大虐殺が発生した。しかし、この迫害は、人種的というよりも、すぐれて宗教的のものであったので、洗礼を受けて改宗したユダヤ人 *conversos* の子孫でも、政府の高官や教会の高位聖職者になることができたし、経済活動を独占していた。しかし、強制的に改宗させられたユダヤ人の多くのものは、古き宗教儀礼を秘かに幾世代を通じて保持していた。彼らは、それが発見されると、逆戻りした異端として、火刑に処せられた。

カステイラ王国のイザベラとアラゴン王国のフェルナンドの結婚を通じて、一四七九年、スペインの政治統一はほぼ完

成し、ついで一四九二年イスラム教徒の最後の橋頭堡グラナダが陥落して、民族的統一が完成し、ここにスペインは絶対主義の途に進ずることになる。そしてこの際、スペインの民族的政治的統一にとって、国家の宗教支配は不可分の前提として考えられた。かくして、スペイン絶対主義権力は、都市市民層の支持のもとに、一四八二年、法皇シクストゥス四世から、高位聖職者指名権ならびにローマへの上訴権の禁止を奪取し、かつ教会が握っていた教会騎士団は、それがもつ莫大な富と軍事力とともに、国王のもとに接収されるにいたった。民族国家出現によるローマ教会の普遍的支配の破綻は、異教徒との不断の戦闘を通じて民族的エネルギーを噴出するに至ったことスペインにおいて、最も早く出現するのである。それは、一五一六年のフランス絶対主義が獲得したコンコルダートに先だつこと三十四年である。さらにまた、スペイン国王は、中世の異端弾圧に用いられた宗教裁判所を政府の組織として復活することをローマに要求し、成功した。それは、たんなる異端弾圧のみでなく、新生民族国家のイデオロギー的統一を確保して絶対主義政権の基礎を安定さすこと、異教徒の改宗を促進し、没収と改宗者の改悔金によって王室財政を潤すこと、王室に対立する貴族や聖職者に対し牢固たる支配権をもたらすこと、などを目的としていた。

この宗教裁判所の残忍な弾圧は、一四八二年から九四年にかけて大審問官であったトルケマダの時期に絶頂に達した。九二年のグラナダの勝利が、スペイン国民の宗教的民族的熱狂をかきたてたからである。トルケマダ⁽¹⁾自身改宗ユダヤ人(マラノ Marrano と蔑称されていた)の血をひいていたが、まさにそれゆえに、彼の執念は合理的打算を超えていた。改宗ユダヤ人の多くが真のキリスト教徒にならないのは、彼らを教唆する頑固に改宗を拒んでいるユダヤ教徒がいるからだと考え、全ユダヤ教徒の追放を主張したのである。国王フェルナンドと女王イザベラは、それが経済活動に重大な打撃

を与えることをおそれて反対したが、「銀三十枚でキリストを売ったのはユダではなかったか、陛下は銀三十万ドウカー
トで主を売られるのか!」と恫喝されて、屈服してしまった。かくして、十六万人にのぼるユダヤ人が船に乗せられ、北
アフリカ、レバントに追放されることになったのである。⁽²⁾ さらに血統が詳細に調べあげられ、迫害の犠牲者が出た家系の
ものは、一切の公職、教会職、大学さらにはギルドから追放されてしまった。イスラム教徒に対する弾圧は、グラナダ陥
落からほぼ十年の間に徹底的に遂行され、改宗を肯じないものは虐殺されるかアフリカに追放されるかしてしまっ
たものは農奴化され、法の保護の外におかれた。だが、それはあまりにも高価な代償をともなった。半島北部におい
てはユダヤ人追放によって、経済活動は萎縮し、かつて豊かな農業地帯であった南部地方は荒廃の極に達し、現在までその
名残りを止めているといわれている。⁽³⁾ また宗教裁判の熱狂は、後のジェズイット理論家マリアナによっても、「それは脅
ろしい悪に対して天が与え給うた救済策であるが……はなはだ高価なものについた。人々の名誉も生命も財産も、すべて
審問官の手に握られてしまった。父の罪で子が罰せられた。恐ろしい処刑、秘密審理、財産没収等々はあらゆる人々に恐
慌を捲き起した。審問官の専制は多くの人に死よりも悪いものと思われたのである。」⁽⁴⁾

だがいづれにせよ、皇帝法皇制のもとにイベリヤのキリスト教化は完成したのである。そして、この体制の頂点に立っ
て、聖俗両面にわたって、縦横の敏腕をふるったのが、国民的英雄と称されるヒメネス・デ・シスネロス Ximenes de
Cisneros である。彼の中には新旧の思想が奇妙に入り混っていた。フランシスコ会原始会則派修道僧であった彼は、い
かに枢機卿の衣をまとおうとも、その下には拘禁衣を膚につけ、夜は床で眠るといふ苦業を死に至るまで続けていた。ま
たトレド大司教として、グラナダのイスラム教徒を強制的に改宗せしめ、王国大法官としては、国費や私費を投じて北ア

フリカに十字軍の遠征を試みた点でも中世的といえよう。だが彼は同時にルネッサンス人文主義を身につけた学者であり、イタリアから人文学者を呼びよせ、自ら私費を投じて、アルカラ・デ・ヘナレスに大学を創立し、トーミスト・スコティストとならんでオッカミストにも講座を与え、最新の文献批判学に従って、ヘブル・カルダイ・ギリシャ・ラテン語の新旧約聖書の多国語訳（コムプルトゥム・ポリグロット）を世に先駆けて編纂するという画期的な事業を遂行したのである。さらに、皇帝法皇制の権力と宗教裁判所大審問官の権力を背後に控え、彼は鉄のごとき意志をもって教会改革を遂行するに至った。まずスペイン修道院の全状況を調査し、各修道院を歴訪説得して規律を回復し、修道院諸特権を廃棄し、その地代や世襲財産を奪い、教区や病院に分配し、墮落した修道僧を船に乗せてモロッコに追放するという俊烈な措置を講じた。⁽⁵⁾ ついで、俗間聖職者の改革に乗出し、幾多の抵抗を排して皇帝法皇制のヒエラルヒーをそこに貫徹せしめることに成功したのである。さらに、彼は法皇庁が聖ペテロ寺院建設のため発行した贖宥状の販売に対してもルターより早く抗議していた。⁽⁶⁾ また修道士たちの精神の糧として、中世の神秘思想の著書や修徳書を導入し、「イミタチオ・クリステイ」をスペイン語に翻訳せしめたのである。かくして、皇帝法皇制が全ヨーロッパに先駆けて成立したのと同じく、プロテスタント宗教改革以前に、カトリック宗教改革が全ヨーロッパに先駆けて、ここスペインにおいて形成されるにいたったのである。

まさにヒメネスの一身のうちに、全スペインの政治宗教体制が凝集したばかりでなく、十六世紀を通じてプロテスタントイイズムと抗争しつつ自己変革をとげていったカトリック世界の政治宗教体制の原型が、ここに見出されるといえよう。そして、その後ヒメネスから発した宗教思想運動は、全ヨーロッパの普遍性を担いつつ展開していく。すなわち、第一

は、彼のカトリック改革をより俊烈により方法的組織的に遂行せんとするイグナチオ・ロヨラのイエズス会の発展方向であり、第二はこの徹底したオーソドキシイの体制によって疎外された内なる魂が夢みる神秘主義的方向である。ちなみに、近世の神秘主義はスペインのそれを原型とし、スペインから発したといわれている。また、前者のうちには、数世紀にわたってキリスト教の大義のために胸おどらせて戦った十字軍戦士の戦斗的軍人的エーストが脈打ち、後者のなかには、異端審問と皇帝法皇制の抑圧の下に改宗せしめられたコンベルソスの鬱積した宗教的情熱が宿っているといえよう。

さて、ミカエル・セルヴェトゥスの思想を追求する前提として、特殊スペインの宗教状況を延々とたどってきたが、ただ若干の分析が必要である。なぜなら、第二の方向の神秘主義的心性こそが、彼の思想の基底をなす宗教的心情を培ったからである。従って、今これについて若干の説明を加えることにしよう。

きびしい強制によって改宗させられたから、コンベルソスは不承不承外面的にキリスト教儀礼に応じたと考えられるであろう。たしかに多くのものは然りであった。しかし、かなりの者たち、とくにインテレクチュアルのうちには、主体的にキリスト教をうけ入れたものが多数存在していた。そして彼らこそ、一六世紀初頭いまだ反宗教改革の戦斗準備が行われる以前、スペインの宗教意識を豊かに開花せしめ、その後のスペイン神秘主義の伝統を形成する役割を果すに至ったのである。⁽⁷⁾ その理由は、第一に、彼らは異った基盤からキリスト教を受容したため、その受容の仕方は、生れながらのクリスチャンが既存の信仰形態を伝統の問題としてアン・ジツヒに墮性的に承認するのとは異なり、すぐれて内面の問題としてキリスト教を把えた点にある。⁽⁸⁾ 第二に、彼らが神秘主義的になったのは、マラノスというアウト・ロウの状態に置かれたため、教会内の神学的制度的関心を不可避的に断念せざるをえず、そこで鬱積した宗教意識が内にこもって、神との一

体化の方向に向うことになったからである。そしてさらに、この神秘的一体化の方向を促進する要因としてあげられるべきものは、改宗によって彼らがユダヤ教の律法から解放されたことであつた。彼らの生活をがんじがらめに束縛していた些末な宗教儀礼からの解放感⁽⁹⁾は、同時に新しく受入れたキリスト教的形式主義や儀礼をも回避してイエス・キリストとの直接の交りに容易に入つて行くこととなつたのである。彼らイルミニスト Illuminist (アルンプラドス Alunbrados ともよばれた) の代表者であるオスナは、エクスタシーの甘美さ、精神的昂揚のいいがたき喜びを切望しつゝ、次のように語つている。「神についての知識は、道徳的美徳によって純化され、神学的美徳によって照らされ、聖霊の賦与と山上の垂訓によつて完全にされた魂の情熱的な愛についての知識なのである。頭や手や眼や足よりも価値あるものはハートである。心の備えなき外的儀式はなにもにも値しない。言語に絶した苦悶を通じて神への道は開けるのである。」⁽¹⁰⁾このような神との神秘的な一体化は、カトリック教会のよつて立つ秘蹟制度を無視してしまふと同時に、一体化から生じる自己神格化⁽¹¹⁾ || エクスタシー状態によつて、罪の意識は消え失せ、道徳的アナキーを生みだし、さらにラディカルな形態をとつて現われる場合、黙示録的予言メシア思想にふけることになる。フランシスコ会修道士メルキオールを中心とするイルミニスト左派グループは、みずから独自の集会を開き、一五二二年、神の力を与えられた靈的な人々によつて驚嘆すべき教会改革が行われ、イエルサレムから地の果てにいたるまで全キリスト教世界は更新され蘇える日が近づいたと予言するにいたるのである。⁽¹²⁾

さて、コンベルソスを中心として、イルミニストが出現するのは、一五〇〇年の時点であるが、一五〇八年のアルカラ大学設立による人文主義の導入、ついで一五二二年カール五世がネーデルランドから来るに及んで、エラスムスの影響

は、一時、スペインのインテレクチュアルの間を風靡するに至った（一五二九年カルルがスペインから去り、ついで反宗教改革が吹きまくと、エラスムスの影響は強制的に排除されることになる）。彼らイルミニストもエラスムス主義を喜んで受入れた。なぜなら、エラスムスの宗教（教会）における外的強制の否定、礼典の軽視は、彼らの反オーソドキシイ的心情を弁証することになったし、彼の単純非ドグマ的敬虔、福音の実践倫理的な理解も、彼らの反ドグマ性とふれ合ったし、彼の原始的純粋性へキリスト教を回復せんとするほとんど黙示録的な願いは、彼らのメシヤ思想を鼓舞することになったからである。⁽¹³⁾

神秘主義とルネサンス・ユマニスムの結合、イルミニストとエラスムスの結合、これがその後開花するセルヴェトゥスの思想の土壌となり、さらにその思想の骨組みをも規定するのである。だが、一五一一年、アラゴンのフェスカ地方の小村ヴィラヌエバに公証人の子として生まれ、一七才でスペインを去るまでのセルヴェトゥスに与えたこれらの思想の直接的影響は、資料が全くなく知ることが不可能である。ただ十四才で、カール五世の聴罪僧ジュアン・デ・キンターナ（フランシスコ托鉢僧団、パリ大学博士、アラゴン等族会議議員）のもとに出仕し、彼のエラスムス的ユマニスムの薫陶⁽¹⁴⁾をうけたこと、そして貪欲に知識を吸収したことのみが明らかである。この時代に、彼がスペインの状況についていかなる認識をもっていたかも明らかではない。しかし、後年ブレマイオスの地理学を編纂し、その註釈で加えた激しいスペインの心性に対する批判と嫌悪のみが、人格形成期の彼のスペイン観をうかがわせる材料となりうるだけである。その註釈で彼は次のようにいっている。

「フランス人はおしゃべりだが、スペイン人は無口でしらばっくれることが巧い。フランス人は気軽に上調子で、陰気

なスペイン人の偽善とくそ真面目のかけらもない。フランスでは、お客は旅籠にいてねいに迎え入れられるが、スペインではあらあらしく無慈悲に扱われる。それで疲れた旅人も村から村へと食を乞うて歩かなければならない。……スペインでは、異端審問官は異端的なマラノスやムーア人に対して絶大な権力を握り、苛酷に取扱っている。それ以外にもおそろしい権力をもった制裁力が存在している。それはヘルマンデタスとよばれる市民の宣誓兄弟団である。彼らは鐘の音の合図で数千人も群り集り、犯罪者を国中いたるところで追求する。伝令は隣国にも送られるので、逃亡しおうせることは不可能である。逮捕されたものは火あぶりにされるか銃殺される。……スペイン人の心は安らぐことがなく、たえず努力し、高度の才能をもっているが、じゅっくり知識を学ぶことがない。」⁽⁴⁷⁾

感受性が強く、あくことのない知識欲に燃えた早熟の天才セルヴェトウスが、神秘主義とユマニスムの知識をむさばり、スペインの正統体制に対して激しい憤りを抱くにいたったことは、充分に予想されるところである。そしてそれは、スペインから去って僅か三年、二十才にして出版した三位一体批判《三位一体論の誤謬について》*De Trinitatis Erroribus* において、一つの思想的結実に導くのである。

注(1) トルケマダの迫害の論理については、R. H. Bainton “The travail of Religious Liberty” 所収の第一章 “The Peak of Catholic Persecution: Thomas of Torquemada” が手頃な譯物としてある。

(2) G. H. Williams “The Radical Reformation” p. 7

(3) H. B. Clarke “The Catholic Kings” in the Cambridge modern History vol I. p. 362

(4) *ibid.*, p. 360

(5) W. I. Collins “The Catholic South” in the Cambridge modern History vol II. p. 400

(6) P. Janelle “The Catholic Reformation” p. 36

- (7) W. R. Inge "Christian Mysticism" p. 213 「イタリヤの神秘主義的ネオプラトニストは、大部分、深い宗教的心情をもって、アレクサンドリア派の哲学者たちが、かつてやったような厳しさを生活のうちに示すことがなかった。それゆえ、ローマがプロテスタンティズムの潮流を阻止しようとして、カトリック神秘主義を復活させようとしたとき、法皇庁の学者や哲学者たちの間に、その役に立つものがないなかった。反宗教改革の神秘主義はスペインにその中心を見出した。『神秘主義はスペインの哲学である』といわれているが、このことは観念論哲学がスペインで栄えたということの意味しない。なぜなら、スペイン人は形而上学を好まなかったからである。スペイン神秘主義は心理学的なものである。その出発点は存在論的なものでなく、神との一致を求める人間的魂なのである。」この記述は、一六世紀中葉以降について、すなわち、プロテスタントに対する自覚的な対応が、スペイン・オールドキシーに生まれてから形成されたスペイン神秘主義についてである。しかし、それ以前に、コンベルンヌを中心とした反正統派的神秘主義が形成されていた。これが徹底的に弾圧しつくされ、一切の抵抗精神をもぎとられ、かつ自ら断念し、逆に権力に奉仕することによって慰めを見出さんとする転回が十六世紀中葉に発生する。その代表者が、聖テレサであり十字架の聖ジュリアンである。彼らとて、宗教裁判所の弾圧をこの時期免れることができなかった。
- (8) R. H. Bainton "The Reformation of the 16 century" p. 131
- (9) William. op. cit. p. 7
- (10) R. H. Bainton "Hunted Heretic" p. 9
- (11) Inge, op. cit. p. 217 「彼らの信奉者は次のように教えた。すなわち、教会の祈りは無価値であり、唯一の真の祈りは一種のエクスタシー状態になることである。そこには言葉もないし心像もない。秘蹟は必要でない。われわれはいかなる罪も犯すことはない。ひとたび神秘的合一に達するとそれは永久に続く。」
- (12) William. op. cit. p. 8
- (13) *ibid.*, p. 12
- (14) Bainton "Hunted Heretic" p. 11 彼はエラスムスを好んでいたカルル五世に、エラスムスのユミニストとして拔擢され、聴罪僧となった。彼はアウグスブルク国会で、メランヒトンに、ルターへの信仰義認がなぜあのような風をひきおこしたのか理解できなかったところ。
- (15) *ibid.*, pp. 93, 94

三、『三位一体論』批判の論理

セルヴェトゥスが批判の対象とした三位一体論は、古代教父たちの数世紀にわたる深刻な論争を通じて確立されたキリスト教会の中心的玄義であった。今、われわれは、この教義の成立の事情あるいはその詳細な内容に立入ることは不可能である。ただ、セルヴェトゥスの批判に関連してそれについての若干の予備知識を読者のために簡単にのべておこう。⁽¹⁾

最初、三位一体論は、受肉の教義が神自身の存在に関して意味するすべてのものを表現する定式として採用された。もし神が現実にはただ一回キリストにおいて肉となったとするならば、これは神の本性にとってなにを意味しているか。唯一神の信仰はユダヤ教の伝統であるが、キリスト教もこの信仰を保持していた。しかし、もし神とキリストとの間に差異があるとすれば、しかもキリストが神であるとすれば、二つの神が存在することになりはしないか。あるいはもし、キリストが神と真にことなるものではなく、ただ神の一行動様式であるとすれば、神は一つになるが、逆にキリストは真に人間性をもったものとは考えられなくなる。そして聖霊が人格化されてくると、二つの問題は三つの問題となってくる。かくして、この困難なアンチノミーを解決するために、神の中に一と三を措定し、統一の中に差異を、一元性の中に多元性を含ましめることになったのである。そして、一を表わすためには、ラテン語でスプスタンティア、ギリシヤ語でウシア、三をあらわすためには、ラテン語でペルソナ、ギリシヤ語でヒュポスタシスが用いられた。すなわち、神は一つの実体と三つの位格をもつとされたのである。またキリスト論においては、キリストは、その神性については神と一つの本性をもち、その人間性については人間と一つの本性をもつと宣せられた。かくして、この三位一体論は三二五年

のニカイア信条において、より正確詳細には四五〇年のカルケドン信条において、定式化されるにいたったのである。

とはいえ、そもそも非合理であり矛盾しているがゆえに信仰されうるこの玄義を、合理的な理性によって哲学的に把握することは不可能であった。三位一体論確立以降も、この教義は中世スコラ哲学者によって様々な色彩をとって、くりかえし弁証されてきたが、ノミナリストのオッカムに至って、一実体三位格は哲学的に論証不可能であり、それゆえにまさに教会の啓示と權威によって信仰されるべきだと主張されるのである。またスコラ神学を毛嫌いしたルネサンス・ユマニストも、理性的認識と信仰を峻別し、三位一体論の哲学的論証不可能性を語りながらも、敬して遠ざけ、敢て批判の対象とはしなかったのである。たとえば、エラスムスは次のようにいっている。「弁証家の論理に従えば、三つの神があるということができる。しかし、無知なる者にこれを語ることは怒らすことになろう。」⁽²⁾

だが、セルヴェトゥスはあえてこの玄義を問題にせざるをえない必然性をもっていた。それはまさに特殊スペイン的宗教状況から発したものであったのである。前節で見たようなユダヤ人・サラセン人の暴力的改宗において、彼らの改宗にとって躓きの石となった教義は、まさにこの三位一体論であったからである。彼らにとって、それは三神論を意味した。それは、「聴けイスラエルの民よ、主たる汝の神は一つである」という彼らの神の言葉と真向から対立しているように思われたからである。またイスラム教徒は、コーランに従って、イエスは、アツラーの神の靈力であり、神の注入によって、永遠の処女から生まれたロゴスであると信じていた。だが同時に、イエスは最大の使徒であろうともただの使徒にすぎず、神ではない、絶対に三位一体を信じてはならないと、コーランは説いているのである。⁽³⁾ また、この教義は異教徒の改宗にとって躓きの石であるとすれば、スペインのキリスト教徒にとっては、自己の正統信仰の証しでもあった。ス

ペイン人は、マラノスやモリスコス（改宗イスラム教徒）のおかげで、ヨーロッパ諸国民からつねに疑いの目をもって見られていたことが、それをいっそう促進した。ルターも、スペイン人を保護者にもつよりは、トルコ人を敵にもつたほうがよい。なぜなら「スペイン人はみんなマラノスだからだ。他の異端は自説を頑固に守るが、マラノスは肩をすくめて確かなことはなにもいわない」といっているのである。このような不信を払い、正統信仰を教義的正確さでもつことが、したがってスペインの国家的名誉となったのである。スペイン正統派の三位一体論に対する心情的一体化は、まことにおそれるべきものがあつたと思われる。たとえば、イグナチオ・ロヨラにおいては、回心以来死ぬまで、時には日に数回も彼に訪れた幻視のほとんどすべては、三位一体の形象化されたものである。⁽⁵⁾さらにエラスムスは、一五一六年の新約聖書ギリシャ語版で、「ヨハネ追加句」⁽⁶⁾を削除したが、これもスペイン人ズニガによって、重大な誤りを犯したといつて攻撃されている。このように三位一体論は、スペインの宗教体制の教義的要石となり、異端審問の踏絵となつていたのである。

イルミニストやエラスムスの影響をうけていたセルヴェトゥスが、正統派の非寛容とその教義的基礎である三位一体論に対して、疑義を抱いていたということは充分想像される。だが、これが教義批判となつて展開されるためには、一五二八・九年頃十七才でトゥールーズ大学に入学し、宗教改革＝聖書主義の洗礼をうけ、ローマ教会の権威から解放されることが必要であつた。トゥールーズ大学は、保守派の牙城であつたが、宗教改革の波はここにもまた及んでいた。学生グループは聖書の研究に没頭していた。後にセルヴェトゥスがいつているように、「聖霊は生きた水の流のようにわれわれのうちに入りこんだ」⁽⁷⁾のである。「千回もくりかえして聖書を読みたい。もし諸君がそれを解さなければ、知識の鍵を失うことになる」⁽⁸⁾と興奮して彼は語っている。

ところで、この聖書研究は、彼に一大衝撃を与えることになった。なぜなら、聖書にはかの三位一体は全く書かれていなかったからである。彼の三位一体に対する疑義は、見事に聖書によって確証を与えられているではないか。聖書になき三位一体論をもって、ユダヤ人やイスラム教徒を迫害することが一体許されるであろうか。いな三位一体論こそ、迫害の「黒き野獣」であり、それを信ずるものは「三神論者」Tritheists、したがって「神なきもの、無神論者ではないか」。この発見によって、彼はスペインの宗教紛争を一刀両断に絶ちきることができると考えたばかりでなく、われこそは全キリスト教の根本的改革、すなわちニカイア会議以前の初期キリスト教への復帰の鍵を見出した最大の改革者であると信じていたたつたであろうことは、容易に想像することができる。かくして、彼は三位一体論がいつどこでいかにして起るにいたったか、そのまやかしの論理はいかに構築されてきたか、そして、これを論理的に粉碎していくためにはいかなる理論を用いねばよいか、という反三位一体の研究に没頭することになるのである。この研究期間は一五三一年五月『三位一体論の誤謬について』が印刷されるまでの僅か二年余りにすぎない。しかも、その間キンターナに扈從してポローニャのカルル五世の戴冠式に出席し、ついでパーゼル・ストラスブルに現われて改革者たちと大論戦を交えているのである。だが、若冠十八・九才にして彼は、ほとんどあらゆる古典を読破し、ヘブル語及びギリシャ語の聖書を読みこなすという驚くべき天才ぶりを発揮したのである。しかも、反三位一体の研究が進むにつれて、すなわち伝統的教義を破壊するにつれて、神の無限性永遠性が彼の眼前に現出してくる。かくして、もはやそこには特殊スペインの宗教状況の克服の問題にとどまらない、無限・永遠なるものとの格闘——神への全く新たなアプローチが不可避となってくるのである。

今、われわれは『三位一体の誤謬について』における彼の神学思想を要約的に把えることにしよう。

(1) 三位一体論破壊の方法論

彼が伝統的な三位一体論を破壊するために用いた哲学的方法は、圧倒的にオッカミズムに負うていた。一実体三位格を哲学的に基礎づけたのは、中世の正統派スコラ哲学である実念論であった。実念論において、普遍は具体的に存在する個物とは別の實在であると主張するのである。そして神は普遍であり、特殊のあらわれである三つのペルソナから独立して存在していると断定したのである。だが、オッカムの唯名論においては、實在は時空の中に並存しているという意味でのみ関連している個物から成り立つと考えられる。人々が個物を分類するに用いる概念は、概念以外のなものでもない。すなわち名辞にすぎない。教会といえど神の心の中にある實在ではなくて、個々の教会員のたんなる総計にすぎない。個物を包含する實在、すなわち「普遍」は、だから實在しないというのである。この唯名論的方法が、三位一体に適用されるとき、その結果は、おのずと明らかであろう。まず、三つのペルソナは時空の中に並存しているという意味においても無関係である。なぜなら、それらのものは時空を超越しているからである。つぎに、正統派教義は三つを統一のうちに保持している一つの實在として神の実体を考えているが、唯名論者にとっては、この実体は「普遍」ではない。それは三つが現実にも共通にもっているものを記述する名辞にすぎないのである。ところで三つのものが共通にもっているもの、それは三つのものがペルソナとよばれるということである。しかしオッカムによれば、

「この共通性は、言葉や概念の中にのみ存在しているにすぎない」のである。かくして、いかなる現実の絆も存在することなく、神性をもった三つのペルソナがあるとすれば、この三つのペルソナは三つの神であるという以外に結論の出しようがなくなる。ここに至って、オッカムは三位一体の哲学的論証不可能ことを認める。しかし、なお教会の權威の下に立っていたオッカムは、理性的認識と信仰の領域を区別し、三位一体が保持されるとすれば、その唯一の基礎は信仰

にあるのだ、とするのである。だが、宗教改革の洗礼を浴びて、教会に対して何らの權威を感じなくなったセルヴェトゥスは、スコラ哲学者が測り知れない不可思議とよぶものを、保持不可能なものとし、彼らがえも言いえぬものとするものを信じ難いと断ずるのである。ニカイア以降、アウグスチヌス、ペトウルス・ロンバルドウス、サン・ビクトワールのリチャード、アンリ・ド・ガアン等の三位一体論証家を、唯名論者のオッカム、ロバート・ホルコット、リミニイのグレゴリ、ピエール・デエーリ等の論理を借用駆使して木葉微塵に粉碎していき、⁽⁹⁾三位一体論は虚偽に蔽われたものだ⁽¹⁰⁾と確信するのである。

(2) 唯一神確立の論理 右のように一実体三位格を三神論として批判したセルヴェトゥスは、ではユダヤ人にもイスラム教徒にも認めうるように、そして聖書に忠実に、いかに唯一神の理論を確立していくであろうか。彼がその際学んだのは、ニカイア以前の二世紀の教父、とくにイグナティウス、イレナエウス、テルトリアヌス等、ニカイア信条を生み出す理論的先駆者たちであった。だが奇妙なことに、彼がそこから導びきだしたものは、ニカイアに至る過程で、いつてみれば唯一神論を樹立するために陥った左右両翼の異端的偏向と、まさに同一の帰結であったのである。このため、若干、これらの偏向を警見することからはじめよう。

彼らの解決方法のうち、第一の左翼の偏向ともいうべきものは、デュナミスのモナルキア主義(勢力論的独裁神論)とよばれるもので、イエスは単なる人間であったが、処女より生まれ、神のデュナミス(力||霊)をうけて神の子とされた。本質的には神的ではなかったが、神的デュナミスを受けたため神の養子とされた(養子論)。すなわち、バプテスマのとき、彼は鳩の形の聖霊をうけて神的デュナミスを与えられ、以後奇蹟を行い、復活の後に神化されたというのである。第

二の右翼的偏向ともいうべきものはモドウスのモナルキア主義（様式論的独裁神論）とよばれるもので、前者とは反対に天父自身がキリストとして歴史の中に顕現したと説く。すなわち、キリストの人格は天父の存在の一顕現様式（モドウス）であるというのである。前者は、イエスの人間性を高調して神のモナルキアを守ったが、キリストの本来の神性を否定し、キリストを神に属従する地位においたとして正統派から批判され、後者はキリストを神の中に解消してしまつて、天父と子との区別を認めない、したがつて天父受難という奇妙な結果となるといつて、これまた異端とされてしまつた。^(註)これに對して、正統派のようにキリストのロゴス（言葉）としての先在を認めず、しかもキリストの神性を保持しようとし、この左右両派の偏向を折衷的に把えよとする新しい異端的解決方法があらわれた。それはサモサタのパウロスを中心とする人々である。彼らは、ロゴスの先在を認めるがイエスの先在を認めないのである。すなわち、ロゴスとイエスを區別し、ロゴスは神の活動の一面面であるとする（この点で様式論）。だから、神とロゴスの關係については、有名な *homoousios* という言葉が、用いられる。だが、ロゴスは人間イエスとは同じではない（この点で従属説）。むしろロゴスが彼に結合され、彼において肉となり、イエスは神の子となつたというのである。かくして、ロゴスは永遠であるが、子は永遠ではないということになる。

正統派三位一体の祖といわれるテルトリアヌスは、三位一体の語を造り、一実体三位格の理論をのべたという点で、ニカイア信条の最初の先駆者といわれているが、にもかかわらず、この折衷的見解に近い見解を、ある論文ではとつていた。というのは、彼はロゴスを神とともに永遠なものとして見做していたが、子はロゴスがイエスにおいて受肉した歴史的出现と見ていたからである。また彼は父と子と聖靈は摂理のあらわれ、あるいは時間的表現として語り、摂理は、子が

すべてのものを父に従属させ、神がすべてのものとなるとき、終るであろうと語っているからである。いってみれば、彼の論理を究極的締結まで進めて行くと、左右両翼の偏向に、すなわち、イエスについては従属論、三位一体については様式論が生みだされる可能性があった。

セルヴェトゥスは、これらの議論を熟考し、自己の立場を明確にせんとした。かくして展開されたのは、意識せずしてまさにサモサタのパウロスと同じく父、キリスト、聖霊の關係については様式論であり、キリスト論においては従属論をとるものであった。彼の唯一神確立の論理を見ることにしよう。

セルヴェトゥスはいう。神はそれ自体としては、知覚も理解も不可能なものである。神はただ自己を啓示ないし表示する限りにおいてのみ人に知られうる。したがって、神はある特定の計画すなわち撰理エホクにしたがい、様々の形態をとった一連の自己啓示を通じて人々に自己を表示される。まず第一に、神はその言葉によって世界を創造された。この自己啓示の創造的活動において、言葉は天地万物を存在にもたらす神自身である。第二に、イエス・キリストにおいて神はより完全に自己を表わされる。そして、自己啓示的で創造の言葉である神は、いっそうの光と人類の救済のため、究極的にはキリストのうちに具体的な形をとられるのである。マリアを通じて神から自己の存在を引き出し神性を体现するにいたった神の子のうちに、唯一なる神は可視的具体的人間の形態をとった御自身を表わせられたのである。第三に、神の自己啓示は聖霊の活動において補完される。聖霊は魂の聖化を行うところの生氣を与える神的流出であるとする。⁽¹²⁾以上のような様式論的発想によって、彼は、三位一体論的発想を生み出す形而上学的実体化を徹底的に克服しようとする。まずロゴス・キリスト論において、ロゴスを第二の人格とする見解（いうところにおいて言葉は汝の対話者）をしりぞけ、スピーカーと

その声、太陽とその光線のごとく、神的デユナミス＝神の靈力の放射としてとらえるのである。第二に、聖靈についても、形而上学的な人格化を避け、それは、「われわれの心の中を動かしたくなる神の靈であり……独立した存在ではない」⁽¹³⁾「神はあらゆるものの源泉であるごとく、神はまた光の源泉であり、光の父とよばれた。私は質の賓辞としてこの光を理解していない。神はわれわれに光を送られた。そしてこれは神御自身である」⁽¹⁴⁾「かくしてわれわれにある神の靈から離れて、聖靈はない」⁽¹⁵⁾というのである。

かくして、セルヴェトゥスにおいては、正統派の三つの、永遠の、区別されかつ同じ実体をもった神的人格という形而上学的三位一体論は打倒され、創造における言葉と子イエス・キリストと聖化の靈において自己を連続的に啓示する唯一の分劃されざる神の三つの顕現に代置されるのである。そしてこれらの三つの顕現は、神性におけるいかなる現実的な差異をも意味するものではない。それは、神的摂理を実現するにあたって、唯一の自己啓示的神の諸形態乃至諸局面にすぎないのであると主張するのである。かくして、ユダヤ教徒もイスラム教徒も、神の唯一性を確保されて、キリスト教の真理性を承認するであろうと彼は考える。

(3) 神秘主義への跳躍　しかし、かくセルヴェトゥスは、ロゴスを非人格化し、聖靈を非人格化し、以上のような様式論的把握で唯一神論を確保しようとしたが、キリストについてだけは、どうしても様式論的把握のみでは済まされないものを感じていた。様式論的把握では、キリストは神の顕現形態となってしまう、イエスの人間的実存は全く失われてしまふからである。だが、聖書にはくりかえし、イエスが人間であることを記しているではないか。単に神が人間的仮象をまとったもの、乃至は神の子ロゴスが肉をはりつけたものとはなしたがたい、神に完全に解消しがたい人間的なるものをイ

エスは担っているではないか。ここから、彼の思想的跳躍が開始される。正統派のように、キリストを神性と人性という二つの本性をもった一人格であり、同時に神と共通の実体をもったものとする形而上的把握は拒否するところである。では、いかにキリストを把握すべきか。セルヴェトゥスは、イエスはなによりもまず人間であつたと確信する。彼は神ともにもロゴスとして原始から天上に存在していたのではない。ロゴスは永遠であるが、息子は永遠ではない。永遠なる神の子ではあつても、神の永遠の子ではない。だが、ヨルダン川のヨハネによる受洗の際、鳩の形をした聖霊をうけ、神の子となり、ついで復活して天にあげられ神の右に座したのである。だから、人間の本性と神性とは深淵をもって区別されるようなものではない。「人間の本性とは、神性の退化によつてではなく、人間性の昂揚によつて、神がそれに神性を伝えることができるような性格をもっている」⁽¹⁶⁾からであると彼は断固として主張するのである。イエス・キリストは、人間神化の輝かしい例証をなしている。そして、われわれ人間にも、それぞれの霊の中にある潜在的に働くエネルギー、ある天上的な感覚、すなわち、潜在的な神性が存在しているのである。「それは欲するがままに吹き、その声をわれわれはきく、それがどこから来たか、どこへ行くかわからない』したがって、すべてのものは神の霊から生まれたのである」⁽¹⁷⁾と。

ここに、われわれは、彼のキリスト論が彼の人間観に根ざしていることを、鮮やかに看取することができるであろう。彼の人間観は、ルターのように背負いきれないほどの罪を負つたうちひしがれた人間ではなかったし、カルヴァンのような隠れた専制的な神の摂理を実現する操り人形としての人間でもなかった。それは神を潜在的に内に抱いている光輝ある人間なのである。ここで、人はかかる人間観は、まさにルネサンス的人間観にはかならないと考えるであろう。たとえば、ピコ・デラ・ミランドラの「おおアダムよ、われわれ(神)は汝を天上のものでも地上のものでもなく、死すべきも

のでも不死のものでもない存在として創造した。……われわれは汝だけに自分の自由意志による成長と発展をあたえた。汝はみずからのうちに宇宙的生命の胚種をもっている。……汝は墮落して下等な被造物である禽獣になることもできる。汝は自分の意志で決定して、より高等な圏、いいかえれば神の圏に再生することもできるのだ」という有名な言葉を想起されるかもしれない。たしかに、セルヴェトゥスは後にネオ・プラトニズムの影響をうけ、彼の神学的弁証にそれを役立つことになる。だが、ルネサンス哲学の中核であるプラトニズムと彼とは決定的な点でことなるところがあった。彼らイタリア・ルネサンス人は、中世教会の統制の弛緩から、かつ彼らのよって立つ商業資本の豊かな経済的基礎の上で、ヒューマニズムを謳歌し、自由意志を養えることができた。そこには深い宗教的心情は存在していなかった。ところが、セルヴェトゥスの場合状況は全く逆である。上には、スペイン正統派が異端審問のきびしい鞭をもって立ちほだかり、下には民族統一で噴出したエネルギーはあるとはいえ、同時にコンベルソスの悲哀が全スペインを蔽っていたのである。彼らの国家ならびに教会に対する憎悪と憤激、にもかかわらず現実には抵抗しえない悲哀、かかる屈折した心理が彼らをしてイルミニズムの神秘主義に走らせ、受難のイエスとの神秘的同一化を生みだすことになるのである。セルヴェトゥスのキリストの人間化（それは決してキリストを低めるものでなく、逆に父なる神にとってかわるほど最大限にキリストを栄光化するもののだが）、そして人間の神格化の可能性の高唱は、まさにしいたげられたコンベルソスの鬱積した願望を神学的に代弁しているといえるのではあるまいか。

以下、次号において、この「三位一体の誤謬について」と『三位一体問答』 *Dialogorum de Trinitate libri duo, de*

justicia regni Christi, capitula quatuor にあらわれた彼の神観・キリスト教・人間観をより詳細に検討し、かつ、原始キリスト教がニカイア＝カルケドンの正統教義に変質していく過程と対照しつつ、セルヴェトゥスの神学に潜む隠れた動機を抉出し、その階級的社会的性格を把握することに努めよう。かくしてこそ、カルヴァン対セルヴェトゥスの血みどろの論争の眞の階級的意味が明らかになるからである。そして、この分析が終わった後、『キリスト教の復位』にみられる後期の彼の完成された全思想体系を把えることにしよう。

注(1) 原始キリスト教のキリスト観がニカイア＝カルケドンの三位一体論へと発展していく過程を、階級的諸状況との関連において精神分析的に鮮やかに追求した(もっともいくつかの論証の欠落があるが)論文は、Erich From: *The Dogma of Christ* 1930 邦訳『革命的人間』所収創元新社である。

(2) Banton: "Hunted Heretic", p. 31

(3) 井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫上巻「かくて我ら(アッラー)ムーサー(モーゼ)に聖典を授与し、彼のあとも続々と使徒を遣わし、(中でも)マルヤム(マリア)の息子イエーサー(イエス・キリスト)には数々の神兆を与え、かつ聖霊によって(とくに彼を)支えた。」(二五頁)「これ啓典の民よ(ここではキリスト教徒への呼びかけ)、汝ら宗教上のことで度を過し(三位一体やキリストの神性の教義などを指す)てはならぬぞ。アッラーに関しては真理ならぬことを一ことも言うてはならぬぞ。よくきけ、教主イエーサー、マルヤムの息子はただのアッラーの使徒であるにすぎぬ。また(アッラー)がマルヤムに託された御言葉(ロゴスの直訳)であり、(アッラー)から発せられた靈力にすぎぬ(神でもないし、神の独り子でもない)。さらば汝ら、アッラーとその(遣わし給うた)使徒たちを信ぜよ(とくにキリストだけを有難がるなという意)。決して「三」などというてはならぬぞ(三位一体の否定)。差し控えよ。その方が身のためにもなる。アッラーはただ独りの神にましますぞ。ああ勿体ない。神に息子があるとは何事ぞ。天にあるもの他にあらぬものすべてを所有し給うお方ではないか。保護者はアッラーお独りで沢山ではないか。」(一四二頁)。()内は訳者井筒氏による挿入。

(4) Banton, op. cit. p. 10

- (5) 三位一体がイグナチオの幻視に形象化されている例として、彼の日記（それは三位一体ばかり書いてある）の一節を引用しておこう。「三月六日、ミサのとき、おぼろげでなく、輝かしく、非常に輝かしく球形をした神の存在そのもの、神の本体」を見る。《そして、その本体から御父が出、あるいは流れ出るように見えた。それ故「テ」(Te)「すなわち、父」というとき、神の本体が御父よりさきに私の目の前に現われたのであった。》おなじ日ミサの後で球形をした神の本体のおなじ幻視が現われる。しかし今度は三つのペルソナがあり、その三つともが《球形の外へ流れ出すに》本体から湧き出て、あるいは流れ出るのを見る。」
Joseph de Guibert "La Spiritualité de la Compagnie de Jésu" p.34
- (6) Comma Joanneum Ⅲ ハネ第一書五章七・八の間に後世挿入された文句「天において証するもの三つあり、父と御言と聖靈とこれなり、而して三つのものは一つに帰し給う。」
- (7)(8) Bainton. op. cit. p.13
- (9) E. Donnemuegue "Jean Calvin : les hommes et les choses de son temps" vol. VI p. 228
- (10) これについては、Bainton "Michael Servetus and the Trinitarian Speculation of the Middle Ages" in "Autour de Michel Servet et de Sebastian Castellio" ed. by B. Becker に詳細かつ鮮やかに論じられているので、本稿ではふれないことにした。
- (11) フロムによると、この従属説（養子論）と様式論は全く対極的立場に立つように見えるが、実は全く同じ基盤に立つものである。すなわち、原始キリスト教における小百姓、職人、貧乏人たちの神々支配階級に対する屈折した反逆がその底にあるというのである。「精神分析的説明は、この二つの単一神論の運動の類同性を明らかにする。養子論的思想の無意識的意味が、父なる神をとりのぞこうとする願望にあることは、すでに指摘した。もし人間が神になることができ、そして神の右の王座につくことができるのであれば、神は王座を追われることになる。それと同じ傾向が様式的教義のうちに明らかに見られる。もしイエスが神の表現にすぎないのであれば、そこではまさに、父なる神自身が十字架にかかり、苦しみ、そして死んだことになる。それはパトリシアニズム（聖父受難説）とよばれる見解である。この様式論的概念のうちに、われわれは、父なる神に対する無意識の敵意を含んでいる古代近東における神の死の神話（アッティス、アドニス、オシリス）との、明白な類似性を認めるのである。…：単一神論は、養子論の場合も様式論の場合も、神への畏敬の増大を表示しているのではなく、その逆である。それは、人間の神化や、神自身の十字架上の死ということにあらわれている、神を排除しようとする願望の表示なのである。…：われわれは新しい王国を樹立するためにふたたびイエスがくるという終末論的観念が、原始キリスト教信仰の本質的な部分であり、父にたい

して革命的な、そして敵意をもった観念であることを見てきた。それゆえ、初代キリスト教の教理とのつながりが証明されることの二つの単一神論の運動のうちにあたり以上以上の観念を見いだすとしても、決してふしぎではない。テルトリアヌスやオリゲネスなどが、キリスト教信者の大部分が単一神論的な思想をもっていることを立証しているのも、驚くにあたらないのであり、そして、この二つの形態の単一神論にたいする戦いは、本質的には、大衆の中に根を張っていた、父なる神や国家にたいする敵対傾向にたいしての戦いであったことを、われわれは了解するのである。〔谷口隆之助訳二一六―二一九頁。〕

(12) Mackinnon "Calvin and the Reformation" のすぐれた要約による。

(13)(14)(15) Bainton. op. cit. p. 48

(16)(17) *Ibid.*, p. 47